

旭川文学資料友の会

友の会通信 第16号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会

〒0700044

旭川市常盤公園旭川市常盤館内

TEL 01666-2213310

FAX 01666-2273334

新しい事務局体制が決まりました

旭川文学資料友の会

会長 菅野 浩

五月三十一日で辞任した山崎事務局長と、七月三十一日で離職した浅野留美子会計担当職員の後任として、九月一日付で澤向英知さんが事務局長として、九月十五日付で池田晴美さんが会計担当職員として就任しました。

澤向事務局長は、クリスタルホール館長など旭川市職員として永年勤務して定年退職、温厚誠実な人柄として知られています。

池田晴美さんは、永く旭川育児院の会計を務め、会計業務に精通し堅実な仕事で評価を受けています。

ベテラン二人を迎えて新しい事務局体制が整い、旭川文学資料友の会の活動のより一層の充実が期待されます。

友の会 職員異動

自己紹介



事務局長 澤向 英知

文学資料友の会事務局長に就任してから三か月が経過しました。折角のお誘いと思いつつも、本心は「文学」に尻込みしながらの決意でした。

現役時に事業として携わってきた音楽と、文学は「創造」という芸術の共通項でつながっているも、音楽はその旋律を音で「聴く」という受け身で鑑賞できるのに対し、文学は「朗読」という手法はあっても、「読む」「書く」という行為がなければ理解できない、という違いがあるように思います。

私は、資料館で働かせていただいて、文学の「創造」のエネルギーを自らの詩や俳句の制作に傾注しながら、文学者や旭川ゆかりの著者や著作、その他文献など約五万冊の書物を相手にその整理を後世のために作業されているボランティアの方々がおられることに驚きを禁じ得ませんでした。また、友の会が指定管理している井上靖記念館もサ

ポートしてくれる会員の方々や、市民講演の講師を快諾してくれる多くの指導者に恵まれています。私は、こうした活動に励む真の文化人たる貴重な人脈を駆使し、相互扶助の精神で手厚く文化を育てる現場で仕事ができることに感謝するとともに、自ら一翼を担えるよう鼓舞していこう、という思いを熱くしております。

会計担当 池田 晴美



この度旭川文学資料友の会で、会計担当として仕事をさせていただくことになりました。友の会では、旭川文学資料館と井上靖記念館の二ヶ所で勤務することになり、最初の頃は大変でしたが、仕事を覚えて慣れてくるにつれて、毎日新鮮な気持ちで仕事ができ、充実した日々を送っております。

子どもの頃から本を読むことは好きでしたが、旭川ゆかりの文学、作家にそれほど関心を持ったことがなく、仕事を通じて初めて認識したというのが情けないところです。けれど、すでに絶版となったものや書店では見つからないような貴重な作品や資料が、いつでも手に取ることが出来るのは本当に幸運なことだと、改めて実感もしています。

まだまだ分からないこと、不慣れなことばかりですが、多くの方々に教えていただきながら、旭川という街が生んだ文学の魅力を自分なりに探していこうと思っております。どうぞよろしくお願致します。

第 18 回 旭川文学資料展
「三好文夫・小野寺与吉、
愛山溪・山の村展」
を觀覽して

大須賀 羊一



「三好文夫・小野寺与吉、愛山溪・山の村展」は、私にとつて青春真盛りの六十年前から、山の村閉村に至る思い出を反芻する嬉しい企画展だった。

その昔年の暮に、食糧等山籠りに必要な一切を特大のザックで背負い、安足間から二十一キロの深雪をラッセルして愛山溪を目指し、年越しをする山男達が居た。一九五七年、謄写印刷機一式に用紙まで背負って現れたのが、後に直木賞候補になった三好文夫(二十七才)であり、彼の発行した新聞に忽ち同調した山男達によって「愛山溪新聞社」なるユニークな組織が誕生した。当然唯一の資本家である三好文夫が初代社長に就任。二代目社長が小野寺与吉。学芸部長だった私が、三代目社長となった。

一九六六年秋、社員二十名の創立十周年記念祝賀会に五十名を超える賛同者が愛山溪に集まるに及んで、「大雪山山の村」に改組することになった。その第六代村長三好文夫の時、山の村十周年の記念行事として企画したヒマラヤトレッキングには、

村民十二名が参加。アンナプルナ峰五千米まで登り、無事帰旭した翌一九七八年、現地で世話になったシエルパリーダーを招待した愛山溪で、突然三好文夫は帰らぬ人となった。没後彼の命日に文学・山の仲間が「梟忌」と称して集い、思い出を肴に盃を重ねることになったが、会場となった文学仲間馬場昭(居酒屋大舟店主)歿後、三十回を数えるこの会も終りとなった。第七代村長小野寺与吉は、その後七期十四年に亘って村長を務めた。第九代村長となった私は、十三年在職の後、村民の高齢化等から二〇〇六年、創立五十周年回顧展を最後に閉村することにした。

新聞社・山の村と五十年間行動を共にした三好・小野寺両氏との思い出・エピソードは枚挙に遑がないが、その多くを収集・展示してくれた企画展に心より感謝し敬意を表したい。

終りに小野寺与吉の詩は、社歌・村歌・NHK募集の「ふるさとの歌」、旭川混声合唱団委嘱の組曲「北の大地」等の他に、旭川合唱連盟が主体となって実施した欧米演奏旅行のメインプロになった「カムイミन्दル」[For the Children]等、海外でも高く評価されたことを追記したい。



三好文夫作 油彩画「笛を吹く少年」
1956.12.24
(中條愛子さん所蔵)

☆第 18 回旭川文学資料展「三好文夫・小野寺与吉、愛山溪・山の村展」期間中(7/14〜8/29)の来館者数は約五百名。三好文夫、小野寺与吉の知人や教え子、安足間居住の方々、山の村の関係者などが觀覽され、懐かしい思い出など教えていただいた。八月一日には、黒田忠さんによる「愛山溪の自然を歩く」と題した講演があり、五十八名の参加者がスライドに映し出された風景に見入った。江口建二さん制作のビデオ「三好文夫最期の三日」も上映され、三好文夫の早すぎる死をあらためて悼んだ。



梟忌に 三好文夫の墓前にて
1990 年
向かって右端 小野寺与吉 左端 大須賀羊一
(写真 大須賀羊一さん所蔵)

小野寺与吉夫人 小野寺久子さんにも寄稿を依頼しておりましたが、去る十一月二十四日、逝去されました。ご家族のお話によると、机の上に書きかけの原稿があったそうです。同展を嬉しそうに觀覽されていた姿がとても印象に残っています。心よりご冥福をお祈りいたします。

「詩誌『青芽』70年の軌跡展」

終了しました

平成27年9月15日～10月31日

「青芽」70年 人生重ね

詩誌『青芽』主宰／旭川文学資料館長

富田 正一



二〇一五年十月三日・北海道新聞夕刊にとつともない大きな見出し「青芽」70年人生重ね』には驚いた。それは、私が常に考えていたことを端的に表現してくださったからだ。

思えば、一九四六年七月、当時二十歳前後の若者、勿論男女の区別なく呼びかけ、日本国の将来についての生活を語り、誌上に発表しあおうという学友がほとんどだったので「学窓」と名付けて創刊した。その後「七つ星」「青い芽」そして現在の「青芽」(せいが)と改題しつつ成長して来たのである。

ふと振り返ると今年で足掛け七十年となった。当初は、まったくの素人ばかりのグループで作品に苦労したが、現在は作品はありすぎる位の豊かさとなった。しかし、同人が高齢者がほとんどで若返り方に苦慮しているのが事実である。

「青芽」は、北海道の詩界では一番古い詩歴があるし全国的に知られるようになった。九月十五日から十月三十一日の期間、旭川文学

資料友の会と青い芽文芸社の共催で、友の会会員の手助けでようやく資料約一千点を飾ることができた。

例えば、「青芽」創刊号から五六九号までと、同人の生原稿や詩画、詩集、色紙、写真、誌歴が古い同人の作品も展示されて、入館者も資料の豊富さに感心していたのが印象に残った。

九月十九日は同じ会場で「講演朗読会」を開いた。当日の司会は、佐藤武、荻野久子が担当。

まず、富田の挨拶、オリジナル朗読「この日のために」菅原みえ子、浅田隆。自作詩朗読・荻野久子、本田初美、佐々木虎力。スピーチ・元同人武藤迪子、渋谷美代子、井上良子、東延江。講演・「青芽」で活躍した詩人たち・文梨政幸、「青芽」70年の軌跡あれこれ・富田正一、閉会の挨拶・森内伝。

閉会の挨拶終了後、直ちに全員で記念写真を撮影。これを周知遅れのため約十名ほど帰られて記念写真に入れなかったのが残念であった。

「グラフ旭川」「月刊メディアあさひかわ」「こうほう旭川市民」等々にも紹介されたおかげで「青芽70年の軌跡展」が盛会に終わることができたことは、各位の配慮と友の会会員ののご支援があったからこそである。

これも、各位に、ただただ感謝の一言に尽きません。ありがとうございました。

旭川文学トピック

※中山田融歌碑について

市内緑が丘東一条二丁目の老人ホーム「太陽園」園庭に中山田融歌碑がある。平成七年六月に太陽園に建立され、平成十四年に同園内の現在地に移設された。

刻まれた歌は、

「ひとりづつ植多たる桜ぞだちきて

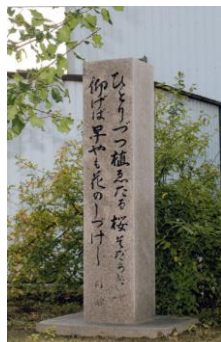
仰げば早やも花のしづけし 田融

中山田融さんは「北方短歌」「ときわ短歌」等に入会し編集者や選者として活躍。昭和五十八年から三十年にわたって「太陽園」短歌クラブを指導。平成二十年旭川市文化功労賞を受賞されている。現在百一歳。

太陽園



中山田融歌碑



※花輪墨雨句碑について

旭川の俳句の草分け、花輪墨雨の句碑は明治三十七年真宗大谷派旭川別院(宮下通二丁目)に建立された。

今年十月二日、墨雨の関係者 山本香代子さんと共に訪ねたところ、すでに句碑はなくなっており、別院関係者の話では、旭川駅の高架化工事るとき何処かへ撤去されたとのこと。現在の所在は不明。句碑に刻まれていた墨雨の句が頭をよぎった。「世の中は皆陽炎の姿かな」

※第4回井上靖記念館青少年エッセーコンクール

入賞作品が決定。募集テーマは「書く」。最優秀賞は「『おもしろい』のひとことから」遠藤港音(筑波大付属中一年)、「てのひらの記憶」奥村玲菜(旭川工業高一年)。十二月二十日井上靖記念館にて各賞授賞式が行われる。

第 19 回 旭川文学資料展 予告

「サークル誌、今野大力と共に」

詩人 佐藤比左良の足跡展」(仮)

平成 28 年 7 月 12 日(火)〜10 月 1 日(土)

来年度の旭川文学資料展は、詩人で今野大力研究者 佐藤比左良さんの足跡をたどる企画展を予定しています。佐藤さんは旭川郵便局、NIT に勤め、職場詩誌「うたり」を主宰するなど、旭川における職場サークル詩運動のリーダー的存在として活動されてきました。昭和四十六年には、第四回小熊秀雄賞を受賞。職場の先輩である今野大力の研究者としても知られています。

ぼくの文学入門

旭川文学資料友の会

副会長 佐藤 比左良

大力が郵便局に入ったのが大正十年、十七歳。ぼくが講習所を卒業して赴任したのが昭和二十三年秋、同じ十七歳の時です。大力は二十三歳で局を辞めて上京。そして、結婚は、ぼくも、彼も二十五歳。なんの関連もないけれど、大力の青春がすこしばかり身近に感じられます。

大力は、父親がウツカヤオマナイでの澱粉工場の経営に失敗し、旭川に舞い戻ってきます。

ぼくは、札幌で生まれ、小学二年の時に、寿司職人として、旭川で働いていた父のところに移ってきました。父は、それが元で身を滅ぼした大酒飲みで、給料の半分は酒代に消えたので、貧乏のどん底でした。そんな訳で、進学など言い出せず、

高等科に進みました。卒業の年は昭和十九年、クラスメートの多くは、少年航空兵を志願して行きました。体の小さいぼくは、東京の軍需工場へ。戦中のことは省略。

旭川に帰ってきてから、通信講習所に入ります。大力のお母さんが「もう少し勤めていたら判任官になれるのに」と言ったように、ぼくのおふくろも、「判任官」になってほしいと思っていました。というのは、おふくろの妹が、電話交換手で「判任官」だったのです。戦後は判任官という肩書きが「事務官」となり、講習所を出れば三年程で事務官になりました。

ぼくが入ったのは「札幌通信講習所旭川分室」といって、栄町にありました。今の二条西三丁目、聖公会というキリスト教の教会を借りた教室で、正面には、最後の晩餐の額がかかっていました。教室の休む日曜日は礼拝があったようで、教卓のところには分厚い聖書も置かれたままでした。

同級生は三十名、殆どが道北各地から来ていて、市内から通っていたのは、数名。ぼくの家は二条五丁目でしたから、教室まで一キロもありませんでしたが、地方からきていた級友は、春光町の寮から通っていました。いまの、春光三条九丁目にあつた将官クラスの師団官舎をそのまま利用、馬小屋と従兵の住む粗末な建物もついており、そこらには舎監が住んでいました。この舎監は、補助教官も務め、なかなかの豪傑で、食料不足を補うため、スコップをみずからかついで、寮生を引きつれ薯を盗みに行ったことがあると聞きました。その寮が、そもそもぼくの文学とは言えない文学へ足を踏みこむところとなるのです。

そこには、増毛から来ていた柚木衆三(本名・川浪武男)が居ました。彼は後に、全通北海道の文学活動を牽引し、四十九歳の若さで亡くなるのですが、その彼がスポーツはダメ、ボーツしているぼくを、文学でもやるのではと眼をつけたので

す。ある日、寮に行くときと回覧の同人誌を作る話を持ちかけてきました。ぼくは、読むものと言えは立川文庫の剣豪伝くらいで、とんでもないと思いましたが。でも、彼はそれこそ、剣豪のような鋭い眼をしていて睨まれると怖いのです。それがぼくの怪しげな「文学」の始まりでした。



手書きの回覧同人誌
「オーロラ」創刊号
1947.11.1 発行
〔編集・発行〕
通信講習所旭川分室
オリオングループ



オリオングループ同人

左から 川浪武男(増毛) 佐藤比左良(旭川) 秋本一男(名寄)
平野久雄(雄信内) 全員 17 歳

旭川文学資料館 副館長

東 延江 さん 旭川市文化功労賞受賞

東延江さんは幼少の頃から、詩、絵画等に豊かな才能を見せ、十四歳の頃から詩誌「青芽」「情緒」などに属しすぐれた詩作品を発表し続けてきました。平成二十一年には詩集『花散りてまほろし』で第四十六回北海道詩人協会賞を受賞。また、文学史、郷土資料の調査研究にも造詣が深く、著書『旭川詩壇史』は旭川の文学を知る上で必読書となっています。平成十三年には「旭川文学資料研究会(現旭川文学資料友の会)」の発足に携わり、平成二十一年の「旭川文学資料館」開館に至る活動の中心的役割を担ってました。文学関係の講演会、講座等の講師としても活躍されています。



旭川市文化功労賞という重み

東延江

家人の入院、手術のさなかでの受賞は、その日があつという間に過ぎました。

「感想は？」と

聞かれるといつも返答に戸惑ってしまふ。

ただいだいてしまった責任の重さがずしりと両肩にのしかかっている様な気がする。

詩を書きつづけて六十年余り、作った詩は数えきれないほどあるが、「これぞ私の詩」というのはどのくらいあるだろうか。もしかしたら片手で

余るほどかも知れない。

文学資料館にしても、たくさんの方の力があつたればこそ成り立っているし、文学資料を旭川に残すために出来た発足当時の文学資料研究会では二〇〇〇年一月に旭川で開催された金子みすゞ展の実行委員の方々が仲間となつてくれた。

これからは残すべきことは山ほど残されている。この旭川文学資料館が市民権を得て旭川になくてはならぬ館の一つになること、働いてくれる人の生活の安定、ボランティアの確保等々数えあげたらきりが無い。

しかし、今までと同じようにここが好きで、この仕事が楽しくてと言つて集まつて来る人がこの旭川にはまだまだいると信じている。

ただ今は前を向いて歩いてゆくだけ。残された時間の中で精一杯やらなければならぬことを一日一日やりこなしていくことに尽きる様な気がする。

「皆さん助けて下さいね。一緒に歩いて下さいね」と会員の皆さん、友人、家族に頭を下げる昨今である。



第15回「東北アジア・キリスト者

文学会議」に出席して

東延江

二年毎に韓国、日本交代開催の表題会議は、キリスト教文書センター主催、旭川文学資料館共催で、今年度の日本は三浦文学館のある旭川市で開催してほしいと韓国側の強い要望で実現した。

この会の会員は全道で私一人。しかも旭川在住ということまで前年度から宿、会場等少々忙がしい思いをしたが、八月六日のレセプションには始まり、七、八日の文学会議は、九時から夕の五時まで実に熱気のもつたもので、私は、これほど充実した会議に久方振りに参加したと思った。

第九回のアジア・キリスト教文学賞は詩人の森田進さん(第一回は三浦綾子さん)で授賞式に華を添えたのは市内カトリック教会聖歌隊の歌う高野喜久雄作詞の典礼聖歌三曲であった。



の内容は森下辰衛さんの主眼講演「『氷点』は聖書をどのように表現したか」にはじまり金恩国著『殉教者―戦争のなかの魂の苦悩』、三浦綾子著『銃口』、朴斗鎮、高野喜久雄の詩が取りあげられ、三浦文学館、井上記念館、三浦綾子文学碑見学で

しめくくった。

開催中三日間、当館学芸員の沓澤さんが会場、写真撮影他細部に亘って協力して会を成功に導いてくれたことを附記したい。

来館者より

文化の奥深さを想像する

村田 裕和



旭川に赴任して三年目になる。授業では、毎年「地域の文学」をテーマとしていて、受講生には旭川文学資料館をはじめとして、市内の文学施設を見学してもらっている。一年目は井上靖と三浦綾子、二年目は小熊秀雄、三年目の今年は安部公房というふう読んできた。学生たちには、展示から多くのことを学び取ってもらいたいと願っている。

旭川は「文学都市」である。さまざまなバックグラウンドをもつ人々が行き交い、しばし立ち止まり、定住者と非定住者が交流する中から数多くの作品が生まれた。作品の執筆は孤独な作業だが、作家はたえず移動し、交流しながら書いている。展示は地域の市民的な目線に沿っていて、運営自体が市民的な努力によって支えられているという点も素晴らしい。そもそも、市民的な文化の厚みこそが、作家の移動と交流を可能としたのではなかったのだろうか。つまり、こうした文学資料館の存在そのものが、地域文化の奥深さ・豊かさの証明なのである。

あくまで個人的な考えだが、旭川にゆかりのある文学者の中でも、とりわけ知里幸恵、小熊秀雄、安部公房の三人は、どのような言語の世界文学全集に入ってもおかしくないと思う。いわば人

類の共有財産である。彼らの共通点も、「移動」と「交流」のなかで作品を創造したことだ。けっして金銭に換算できない文化的財産を私たちは受け継いでいる。ただ、これは単なる物ではない。文学はかたちのある「モノ」と、かたちのない「もの」の両方でできている。「モノ」は所有したり譲ったりできるが、かたちのない「もの」は伝達行為の「あいだ」にしか存在しないふしぎな「もの」なのだ。私たちはそれを誰かに伝えるために託されている。人と人との「あいだ」で、文学作品は生き生きとした言葉として立ち上がる。「モノ」の展示だけがすべてではない。目に見えない「あいだ」を想像させてくれる場所が文学館なのだ。

☆村田 裕和(むらた ひろかず)さんプロフィール☆

一九七五年生まれ。立命館大学大学院文学研究科修士。現在、北海道教育大学旭川校准教授。専門は近代文学・文化。主な著書は『近代思想社と大正期ナショナルリズムの時代』(二〇一一年)。

安部公房と旭川

鳥羽 耕史



安部公房の祖父母は、四国の香川と徳島出身で、東鷹栖の開拓農民だった。父の安部浅吉と母の井村ヨリミは、満州医科大学

に進んだ浅吉の東京留学中に結婚し、国立栄養研究所への派遣で再び東京に滞在していた一九二四年、公房が生まれた。一家は翌年、旧満州の奉天(瀋陽)に戻ったが、戸籍は東鷹栖のままだったため、安部公房は東京で生まれ、旧満州で育ったが、本籍地は現在の旭川市だったことになる。

安部公房と旭川の縁はそれだけでなく、浅吉が欧米留学中だった一九三一年頃の一年間を母とともに東鷹栖で過ごし、その後も時折訪れていた。戦後には浅吉を失くした一家が東鷹栖に引き揚げ、特に母のヨリミは永く滞在したようである。公房の従妹で『郷土誌あさひかわ』主宰の渡辺三子さんとはずっと交流があり、一九七七年の安部公房スタジオ『イメージの展覧会』旭川公演も、三子さんの奔走によって成功させている。

私はそうした関心から何度も旭川を訪れ、三子さんの案内で安部公房の生家跡を訪ねたり、三子さんの解説した安部公房文学資料室の資料を閲覧したりしてきたが、旭川文学資料館のことは不明にも知らずにいた。北海道教育大学旭川校の村田裕和さんに教えて頂き、初めて来てみたが、同人誌やサークル誌などの資料の豊富さに驚いた。例えば『旭川アララギ会報』と『旭川アララギ月報』から、戦後に東鷹栖に住んだ時期のヨリミの作歌活動をたどることができる。一九五〇年に旭川アララギ会に入ったヨリミは、同年十月から翌年十月にかけて、四十一首の短歌を両誌に載せている。一九五一年十一月発表の「ここに四度我月見して悲しめり引揚の夜も明月なりき」からは、引き揚げてやや不本意な四年を過ごした感慨が窺える。他にも佐藤比左良さんが寄贈されたというサークル誌関連資料は膨大にあり、この分野の研究もしてきた私にとっては資料の宝庫である。また資料調査に来るだろうし、杏澤さんが来年夏に企画しているというサークル誌展にも期待している。

☆鳥羽 耕史(とば こうじ)さんプロフィール☆

一九六八年東京生まれ。早稲田大学文学学術院教授。著書に『運動体・安部公房』(二葉社)、『1950年代——「記録」の時代』(河出書房新社)、編著に『安部公房 メディアの越境者』(森話社) など。

リレーエッセイ

詩画展を終えて

立岩 恵子

詩画展のガラスケースの中には「自分らしさの分る物何でもあり」と言われても 是て私は何者？今の私が在るのはと 五十年ほどを遡ってみましたら 原点は母でした 母は私が中学二年生の時母親たちの詩の会「環」(つながり)を発足させましたので詩を書く事は私の日常の中にあり 当然の様に十年後入会 それ以来母のそばで詩の道を歩き 母を通して大勢の先生先輩方に出会い学び お声をかけていただきました と しみじみ再確認しました そこで母の詩と 中でも幾度も環の会でご講演下さり今は天上界の詩人となられた六人の先生の色紙を並べる事にしました

母の直筆原稿のファイルを何気に開きましたら 初めて見る私の事を書いた詩がありました そこには母が詩う子供の私があり 何回も死にそうで心配させたのかと 思わず 泣いてしまいました どこにも載せず棄てられずだったのですね その三点を並べることにしました

入江好之先生 木内進先生には 当会は発足当時からお世話になり支えていただいた様です 両先生はかつて旭川在住で「情緒」の同人であり 資料室には写真その他の資料があります

英美子先生は 私がお会いした時八十一才で オシャレでパワフル 詩集「アンドロメダの牧場」「授乳考」のタイトルに魅せられ いつもお着物

の羽田野幸子先生には 詩集「陰曆の章」「致死量」に心抉られました

伊東廉先生 河邨文一郎先生お二方は医師でありましたが 伊東先生は病気の事を奥様と二人の秘密とし 河邨先生は沢山のチューブに繋がれ車イスで ぎりぎりまで皆の前に姿を見せました 形は違っても同じく凄いと衝撃を受けました

思えば何とすばらしい先生方との出会い それも母の娘であればこそその事と思われます 先生方のお言葉がふとした時ランダムに耳元に甦ってきます 伊東先生の「あんたは子供の詩なんか書くなよな」は 強烈ですが……

あらためて皆さまに感謝の季となりました

旭川詩人クラブ第二十九回詩画展

好評裡に終了

平成二十七年十一月十日〜十二月十二日

旭川文学資料館第二展示室

「詩画展」参加者

- 東 延江、出雲章子、荻野久子、沓澤章俊、佐藤キヌ子、高野みや子、立岩恵子、土橋和子、富田正一、森 夏生、森内 伝、森山幸代、山口敬子(五十首順)

この度の十一月十日から十二月十二日迄の開催に合わせて、会場を埋める作品をどうするかで度々話し合いが行われ、今回は、各自が壁面と一つのガラスケースを自由に埋めることで決定しま

した。

詩画展の方は、十一月五日、午前十時より飾り付け。共通テーマの「川」の作品は、会場入り口通路の壁面を利用して展示。

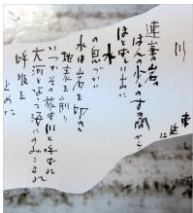
詩人クラブの毎月一回第四火曜日に実施している「詩と遊ぼう」の十月例会で連詩「川」を参加者で書きましたので、その作品も展示。

各自が壁面とガラスケースを埋めるという作業は見事に結実しました。それぞれの個性溢れる展示方法と詩作品が会場を彩りました。

また、開催期間中の十一月二十四日には、午後一時半から詩画展行事の「詩と遊ぼう」が開催されました。富田正一会長の挨拶、司会は立岩恵子さんで始まりました。参加者は十六名。文化功労賞を受けられた東 延江さんの講演を予定していましたが、ご当人のご都合が悪く欠席となり、かないませんでした。

例年は連詩が恒例となっています。どのような形にするかと悩みましたが、参加者全員で、「母」という詩を書くこととなりました。

最初に沓澤章俊さんが有名な詩人の詩をコピーして配り、会員が朗読、その後「母」の詩を全員が書きました。出来上がった詩をコピーして配り、自分の「母」の詩をそれぞれが朗読しました。閉会の挨拶は森内 伝さん。



皆さんの作品から様々な母親像が浮かんできました。心が和む貴重なひと時でした。

参加者の皆さん、ありがとうございました。

事務局 山口敬子

事務局だより

※当会(会員)が今年、参加関係したいくつかの事業を紹介します。

・十月一日、二日に開催された第三十七回全道高等学校図書研究大会(北海道高等学校文化連盟主催)で、旭川文学資料館が会場の一つとして協力。旭川内外の約四十名の高校生が企画展等を観覧した。

・十一月三日文化の日に毎年行われる市内各施設合同のスタンプラリーに、旭川文学資料館が今年初参加。小熊秀雄色紙の画像入りオリジナルクリアファイルを作成し記念品とした。クイズラリーも行い、子供を含めた約百十名の方々に参加いただいた。クイズラリーの問題は以下のとおり。(何問解けますか?)

- 1、(小熊秀雄さんのコーナーに行ってみましょう)そこには小熊さんが使っていたものが置かれています。それは何でしょう?
- ①いす ②机 ③ベッド
- 2、小熊さんが書いた童話はつぎのうちどれでしょう?
- ①裸の王様 ②人魚姫 ③焼かれた魚
- 3、小熊さんが書いた漫画の原作はつぎのうちどれでしょう?
- ①鉄腕アトム ②宇宙戦艦ヤマト ③火星探検

・十一月二十一日午後六時半より市内六条七丁目「じゃずそば放哉」にて、「小熊75周年・大力80周年記念朗読会」が小熊秀雄市民実行委員会主催

で開催された。佐藤比左良さん、加藤雅敏さんらが今野大力作品を、石井ひろみさん、袖山基子さんから小熊秀雄作品を朗読。旭川明成高校生徒の佐々木月(るな)さん、土井竜聖さんも朗読に参加。会場満員の市民約七十名が聴き入った。

寄贈資料紹介

収集・提供いただいた資料本の数々

今年七月中旬から十二月初旬まで、追加された資料の一部を紹介します。

文学資料調査事務室

学芸員 沓澤 章俊

- ・北海道情報誌「HO」(ほ)二〇一五年八月号 旭川特集号。井上靖記念館、旭川文学資料館の記事掲載
- ・富盛菊枝『鉄の街のロビンソン』(富盛菊枝児童文学選集1)
- ・川村暮秋句集『乾坤』
- ・花輪墨雨名刺(十三枚)
- ・『記念写真帳』昭和十六年、大日本国防婦人會旭川市中央分會発行
- ・石川郁夫『三好文夫―告発と贖罪・短刀(マキリ)と突き出す腕の勁さ』巻末に詳細な三好文夫の年譜、作品目録付き。
- ・石川郁夫『犬の岬』
- ・宮崎二三子『命いまを重ねて』(エッセー集)
- ・小冊子『常磐物語』二〇一五年、旭川市ロータリー商店会編。ロータリー周辺の店舗施設を今昔の写真入りで紹介
- ・河崎秋子『颯風の王』(三浦綾子文学賞受賞作)復刻版『木島始詩集』

友の会人事動向

(敬称略)

- ・三好文夫版画「愛山溪クラブと愛別岳」ほか。
- ・『新選 名著複製全集近代文学館』(ほるぷ出版)
- ・小野寺与吉関係資料。旭川市聖園中学校文芸部誌「白い道」1。小野寺与吉『ヨーロッパ訪問旅行メモ』。混声合唱組曲「北の大地」楽譜。他
- ・『愛山溪新聞社・大雪山山の村通算40周年記念誌』
- ・小池栄寿ハガキ(原田照子宛)
- ・金達鎮詩集『慕わしい世界があるから』(佐川亜紀訳)
- ・『知里幸恵 銀のしずく記念館ガイド』
- その他、各文芸誌、各文学館館報等、多数寄贈いただきました。ありがとうございました。

【新入会員】

澤向英知 猪股洋平

【退会者】

山崎則明 浅野留美子 秋山幸恵

武山淳子

【逝去】

二〇一五年八月二十一日没 宮崎二三子様

二〇一五年九月五日没 黒田一秀様

二〇一五年十月二十一日没 松田一夫様

【現在会員数】 一九八名(十二月二日現在)

お知らせとお願い

旭川文学資料館の受付業務ボランティアを募集しています。興味のある方は事務局までご連絡ください。また、不用なスチール製の本棚を提供してくださる方がおられましたら、ご連絡ください。(友の会事務局 Tel 0166-22-3310)